

『百年後の世界』

『千年後の世界』海野十三

千紘リカ

あらすじ

西暦 2125 年。大野がこのラボの中で百年間の冷凍睡眠から目覚めてもう六十時間が経過していた。一刻も早く外の世界を見てみたいと願う大野だが、ラボは外側からしか開かない仕組みになっていた。やがてドアがあいて……

4,916 文字

大野は落ち着かない様子で窓のない狭いラボの中を歩き回っていた。室内には一人掛け用のソファが一脚だけあり、彼はそれにかけてみたかとおもうとすぐに立ち上がった。そして、ラボの外部へと通じるドアの上にあるデジタルカレンダーの2125年5月7日の表示を見て、大野はまたニヤリとした。またというのは、大野は約六十時間前に目覚めてからもう幾度となくそれをくり返しているからだ。彼は今世紀の人間ではない。21世紀から百年の冷凍睡眠をへてきたのである。部屋の隅には彼が百年間身を横たえていたカプセルが鎮座している。とにかく彼は一刻も早く外の世界を見てみたかったし、実験の成功の喜びを百年後の人類と共に分かち合いたいと願っていたのだが、このラボは外側からしか開かない仕組みになっていて、彼は誰かがドアをあけてくれるのを待っているのである。

大野は四十二才。このラボの主任研究員である。実験にあたっては被験者を探すのが通常だが、今回ばかりはそういうわけにはいかなかった。結果を自分の目で確認するには自ら被験者になるほかなかったのだ。また、大野には同い年の妻英里子と中二の娘がいた。大野は二人の将来のことも考え、英里子には離婚届と一緒に自宅マンションの権利や預金通帳、その他一切合切を渡した。まあ、どれも百年後の未来に役に立つとは思えなかったからではあるが。

大野はまたデジタルカレンダーの表示を見てニヤリとした。そして、外の世界に思いをはせた。それも彼が目覚めてからもう何度となく繰り返してきたことだった。彼はかつてSF映画で観た様々な未来の光景を頭の中に思い描いた。だが、それらはいずれも彼を納得させるものではなかった。振り返ってみれば、20世紀から21世紀にかけての百年で世界は驚異的な変化を遂げた。しかも、その変化のスピードはどんどん加速を続けてきた。だとするなら、きっとこのドアの向こうには脳みそがぶっ飛ぶくらいに想像もつかないような景色が広がっているに違いないと、大野は思った。

「I overslept, sorry」

ふいに大野が呟いた。

「I overslept, sorry」

少し調子を変えてもう一度そう呟いて、大野はまたニヤリとした。この一言で場内はドッと沸くに違いないと大野は思った。それはこの壮大な実験の結果を報告する記者会見のスピーチの冒頭のフレーズである。出だしをどうするか、大野

はさっきからずっと考えていたのである。だが、待てよ、と大野は思った。「I overslept」の後は少し間をおいた方がいいと大野は思った。そして、幾分はにかんだ感じで「sorry」と続けるのはどうだろう。彼は室内を歩き回りながらそのフレーズを少しずつ調子を変えてくり返し何度も口に出して言ってみた。それでもまだ今一つしっくりこないという顔をした。

そんなことをしているうちに大野はのどの渴きを覚えた。馴染みの喫茶店カサブランカのマスターが饞別代りに持たせてくれたコーヒーがあったのを思い出した。大野はアルコールがまったくだめであった。酒好きがお気に入りのバーに出入りするようになり、大野はカサブランカにあししげく通った。コーヒーの味もさることながら、気さくなマスターとの会話が日々の研究で疲れた大野をリフレッシュさせてくれたのだ。大野は真空パックの封を開け、マスターがいつもやっていたように丁寧にドリップしてコーヒーをいれた。それから大野はソファにゆったりと身を沈めると時間をかけてコーヒーを味わった。

二杯目を飲む頃には大野はいくらか落ち着きを取り戻した。すると、今度はネガティブな感情にとらわれ始めた。なにしろ目覚めてからすでに六十時間以上が過ぎていた。もしかすると、自分がここで眠っていることは忘れられているんじゃないかということだ。彼を直接知る人間は当然ながら今はもう誰一人生きてはいないのだ。眠りにつくにあたって、大野はラボの管理を彼が最も信頼する部下の高林に一任した。高林はまだ二十代後半と若いのが、優秀でよく気がつく男だ。だが、あれから百年だ。ラボの責任者もその後何人か入れ替わっているはずだ。引継ぎがうまくいっていないなんてことはないだろうか。ただでさえ百年後でなければ結果のでない大野の研究については、冷ややかな目で見ると空気は社内には少なからずあったのだ。しかも、このラボは地下通路の一番奥にある。いやいやいやいや、そんなはずはない。大野は自らの考えをあわてて否定した。

あるいは大野はこうも考えた。この百年の間に核戦争が起きていて外の世界は様相が一変してしまったのではないかということだ。地下にあるこのラボは運よく被害を免れたものの、一步外に出ればどこまでも荒涼とした風景だけが広がっている。そんな景色を想像して大野は思わず身震いをした。突飛な考えではあるが、可能性は否定できない。彼が眠りについた 2025 年の時点においてさえ、きな臭い状況は世界中そこかしこにあったのではないか。

その時だった。ドアのすぐ上に取り付けた赤色灯が回転を始めた。それは外部からドアのロックが解除されたことを意味している。大野は安堵と同時に胸の高鳴りを覚えた。いよいよ百年後の人類との対面である。大野は目にうっすら涙さえ浮かべていた。

そして、ドアは開かれた。

大野は自分の目を疑った。そこに立っていたのは高林である。大野は自分より頭ひとつ分背が高い高林を見上げ、なにか言おうとして口をひらいてみたが声にはならなかった。高林はただ目を伏せた。

「ど、どうしてキミがいるんだ」

大野はやっとのことでそう言った。

高林は目を伏せたままだ。

「どういうことなんだ。今、何年だ？ 西暦何年の何月何日だ？」

と、大野はきいた。

「2025年の5月7日です」

高林は小さな声でそう言った。

「2025年？ 5月7日だって？」

彼が眠りについたのは2025年の4月26日の土曜日だ。そして、目覚めたのは三日前だから5月4日だ。だとすると、ほぼ一週間しか眠っていなかったということになる。大野は急に脱力感を覚えた。実際大野はへなへなとその場に崩れかけ、高林に抱えられて辛うじて立っていられるような状態だった。

それでも大野はすぐに自分の足で立ち上がった。腰に廻った高林の腕を振りほどくと、

「高林君来てくれ。一緒に問題点を検証しよう。こういうことは早い方がいい」

「でも、主任、お体が」

「今のは単なる寝不足のせいだ。それに、いったいどういうわけだ。目覚めてから六十時間以上もほって置かれたんだぞ」

「すみません。昨日までゴールデンウィークで社内には誰もいませんでしたから」

大野は一瞬返す言葉につまるが、

「とにかく、まず検証だ」

「主任がまずやるべきことは髭を当てることです」

大野はぼうぼうになった無精髭を手の平で撫でた。

大野はタクシーの後部座席で車窓に流れる 2025 年の東京の夜景を見るときも眺めていた。そして、ついさっき交わした高林との会話を思い出していた。

「とりあえず今夜はビジネスホテルで休んでください。予約の電話を入れておきました」

「宿直室で十分だ。その方が通勤時間の節約にもなる」

「ダメです、主任。今夜はとにかくちゃんとしたベッドで休んでください。ああ、それと、さっき産業医の中田さんとも話したんですが、念のため人間ドックを受けた方がいいかと……」

高林のそんな心配をよそに、大野はふと面白いことを思いついた。そして、運転手に行き先の変更を告げた。

「なに？」

白いバスローブ姿の英里子が玄関ドアを細目にあけ、露骨に迷惑そうな声でそう言った。ここは大野の自宅だ。いや、正確にはかつて自宅だったマンションの一室だ。そんな英里子の態度に少々面食らった様子で遠慮がちに大野は言った。

「入れてくれないのか」

「なんで」

「ちょっとでいいんだ」

「時間をわきまえてよ」

「なに、怒ってるんだよ」

「別に怒ってなんかいらないわ」

「誰かいるのか？」

と、さすがに大野も不審に思い英里子にそうきいた。

「いたらどうだって言うの。あなたには関係ないでしょ。ここは私と有紗の家であなただけの家ではないんだから」

その時、バスルームの方からコトンという音が響いた。

大野は強引にドアをあけ英里子を押しのけると、真っ直ぐバスルームへ向かい、勢いよくドアを開けた。

素っ裸の男が足元に落とした片一方の靴を拾い上げたところだった。その男を見て大野は目を丸くした。男は高林だった。高林は靴を下げた両手を股間の前で交差させピタッと静止している。一方、大野もポカンと口を半開きにしたまま静止している。英里子は平然とした表情で腕組みして壁に寄りかかった。

「どういうことだ？」

大野はやっとのことで高林に向かってそう言った。高林は静止したままだ。

大野は英里子を振り返り、言った。

「おい、どういうことなんだ？」

「なにが？」

「おまえたち二人はなにをしてたんだときいてるんだ」

「別にあなたに答える義務はないわ。もう夫婦じゃないのよ、あたしたち」

「それにしたって早すぎるじゃないか」と言ってすぐ、大野はハタと気づいた。

「前からなのか？」

「やっとならなかつたの」英里子はそう言ってフッと笑った。

「おい、それがどういうことかわかってるのか」

「今更なにッ？ 私のことも家のことも、あなたはもうずーっと前から関心なかったじゃないの」

「こんなことして、母親として恥ずかしくないのか」

「有紗はとっくに知ってるわ。それにあたしたちのこと応援もしてくれてる」

「有紗はどうしたんだ。もう八時を回ってるじゃないか」

「ほら、やっぱり関心ないんだわ」

「どういうことだ？」

「今日から修学旅行よ」

「有紗の留守をいいことに男を連れ込んだっていうわけか」

「ええ、そうよ」

「おまえってやつは」

と、大野は英里子の腕をぐいと掴んだ。

「痛い」

「主任、乱暴はやめてください」

と、高林は靴を下げた両手を股間の前で交差させたまま言った。

「キミは黙ってろ。これは夫婦の問題だ」

「ちょっと痛いから離して」

「主任、やめてください」

高林はそう言って、靴を下げた両手を股間の前で交差させたまま大野の方へにじり寄った。そして、英里子をかばうように二人の間に割って入った。

「な、なんだ、キミは」

と、大野は高林を見上げてそう言った。英里子はそのすきに大野の手を振りほどこき、高林の背後に身を隠した。

「主任、これだけは信じてください。英里子さんとは真剣にお付き合いさせていただけいます」

「キミはなにを言ってるんだ。いったい英里子といくつ離れてると思ってるんだ」

「年の差は関係ありません。僕は英里子さんを愛しています」

と、やはり高林は靴を下げた両手を股間の前で交差させたまま真剣な表情でそう言った。

「残念だがもうキミとは一緒に仕事はできないな」

大野は力なくそう言った。

喫茶カサブランカは表通りから一本入った狭い路地の一画にあった。繁華街の喧騒が小さく聞こえている。

大野がカウンターのいつもの席でいつものコーヒーを味わっていた。閉店間際で客は大野一人だ。初老のマスターがカウンターをふきながら言った。

「素人考えで恐縮ですが、たとえ一週間だったにせよ冷凍状態から無事生還したんじゃないですか。次はきっと成功しますよ」

「次はもうないんです」大野は肩を落として静かに答えた。そして続けた。「有能で最も信頼していた部下を失いました」

大野はつい今しがたの出来事をマスターに話した。マスターは黙って大野の話に耳を傾けた。

大野が話し終わると、マスターは言った。

「もう一杯いかがですか？ 私からの奢りです」

「いただきます」

と、大野は力なく言った。

マスターは準備を始めた。大野はそんなマスターの手際のよい動きを目で追った。それはいつもの大野の習慣である。だが、今夜の大野の目は虚ろであった。

マスターはドリッパーで丁寧に湯を注ぎながら言った。

「チャップリンがこんなことを言ってます。“人生はクローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇である”」

大野の口元がふいに緩んだ。かと思うと、小さな失笑のようなものが漏れた。やがて、大野は声に出して笑い出し、最後には腹を抱えて笑い出した。大野は全裸で熱弁をふるう高林の姿を思い出していた。

それからひと月後、大野は高林に見守られながら再度百年後の世界に向けて眠りについた。